

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0024
調査タイトル	「日本女子大学の卒業生実態調査－第2報 通信教育課程卒業生の場合－」
論文／雑誌名	「日本女子大学の卒業生実態調査－第2報 通信教育課程卒業生の場合－」『日本女子学紀要 家政学部』第49号
著者	真橋美智子、沖田富美子、佐々井啓、塚原典子
掲載ページ	pp.13-22.
発行年	2002.03
出版社	日本女子大学

日本女子大学

紀要

家政学部

49

1. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 沖田富美子・佐々井 啓・真橋美智子・塚原 典子 …… 1	
— 第1報 家政学部卒業生の場合 —	
2. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 真橋美智子・沖田富美子・佐々井 啓・塚原 典子 …… 13	
— 第2報 通信教育課程卒業生の場合 —	
3. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 佐々井 啓・沖田富美子・真橋美智子・塚原 典子 …… 23	
— 第3報 家政学研究科修士の場合 —	
4. 幼児期の運動有能感と行動特性-2- …… 岩崎 洋子・猪俣 春世・吉田伊津美 …… 31	
— 運動有能感の高低と小学校生活との関連 —	
5. 幼児の遊び場面にみる意図の共有のプロセス …… 岩田 恵子 …… 37	
6. 倉橋惣三の保育理論研究 …… 小川 博久 …… 43	
— 保育実践と理論との関係性をどうおさえたか —	
7. 幼児の音楽的な表現活動についての一考察 …… 金本 佳世・大畑 祥子 …… 51	
— 昭和23年『保育要領』を中心として —	
8. ひとりっ子に関する研究 (2) …… 高井一川上 清子 …… 59	
— 保育現場において —	
9. 男子青年の自己意識に関する研究-(1)- …… 福本 俊 …… 67	
10. 極めて速く直線的に自動酸化する異様なりノール酸メチル材料の存在 …… 森田 牧朗・山崎 貴子 …… 71	
11. 阪神・淡路大震災の事例を通してみた被災マンション再建事業に関する研究 …… 石川 孝重 …… 77	
12. ユーザーにわかりやすい揺れ性能レベルの説明に関する研究 …… 野田千津子・石川 孝重 …… 83	
13. 集合住宅に居住する中高生の家族生活からみた自室に関する考察 …… 定行まり子・下戸由貴子 …… 89	
14. 大型児童センター及び児童センターにおける中高生の地域施設利用の実態について …… 定行まり子・根橋由里子 …… 97	
15. 市民ひとりひとりの環境負荷低減に向けた行動の促進に関する考察 …… 平田 京子 …… 105	
— 若者の環境配慮行動に関する意識に着目した場合 —	
16. 雑司ヶ谷の街並に関する研究 2 …… 山崎 美佳・後藤 久 …… 113	
— 鬼子母神信仰の盛衰が街並に与えた影響について —	
17. 2000オリンピック女子バレーボール最終予選のラインアップ分析に関する研究 …… 島津 大宜・泉川 喬一・山本 外憲・明石 正和 — ラインアップの定着率, 変動率, 一致率および順位相関 — 坂井 充・田原 武彦・原田 智 …… 119	
18. 作業用手袋着用時の手部の温熱感覚特性 …… 多屋 淑子・藤村 明子 …… 129	
19. すくい縫いミシン縫製における動的縫い糸張力の測定と縫い糸消費長 …… 松梨久仁子・島崎 恒蔵 …… 135	
20. フリースクールの現状と課題 …… 坂田 仰 …… 141	
— 不登校問題の一断面 —	
21. 少年事件や児童虐待への心理教育的介入の理論的背景 …… 巖岩 秀章 …… 147	
— パーソナリティ・スタイルへのかかわり —	
22. 思春期・青年期における同一化と独自化Ⅱ …… 巖岩 秀章・今村 理洋 …… 155	
— 事例を通しての考察 —	
平成十三年度家政学部第52回生卒業論文論題 …… 161	

平成14年3月

JOURNAL

HOME ECONOMICS

49

1. F. Okita, K. Sasai, M. Mabashi and N. Tukahara : The Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 1 The Case of Graduates from the Faculty of Home Economics —	1
2. M. Mabashi, F. Okita, K. Sasai and N. Tukahara : The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 2 Case of the Correspondence Course Graduate —	13
3. K. Sasai, F. Okita, M. Mabashi and N. Tukahara : The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 3 The Case of Graduate School of Home Economics —	23
4. H. Iwasaki, H. Inomata and I. Yoshida : A Study of Exercise Competence and Behavioral Characteristics in Childhood-2- — The Relationship between Exercise Competence Level and Elementary School Life —	31
5. K. Iwata : The Process of Sharing Intent in Preschoolers' Free Play	37
6. H. Ogawa : Special Features of the Early-Childhood-Education Theory of Kurahashi	43
7. K. Kanamoto and S. Ohata : A Study of 'Expression' Activities in Music Education for Children — on Hoiku-Yōryō in 1948 (Showa 23) —	51
8. K. Takai-Kawakami : The Only Child (2) — In the nursery school —	59
9. S. Fukumoto : A Study of Self-Concept in Male Adolescence -1-	67
10. M. Morita and T. Yamazaki : Existence of Crazy Methyl Linoleate Materials Undergoing Very Rapid and Linear Autoxidation	71
11. T. Ishikawa : A Study on the Rebuilding and Repairing of Apartments Damaged in the Great Hanshin-Awaji Earthquake	77
12. C. Noda and T. Ishikawa : Intelligible Expression of Vibration Performance for Users	83
13. M. Sadayuki and Y. Shimoto : A Study of the Effect of Adolescents' Rooms on their Family Life	89
14. M. Sadayuki and Y. Nehashi : Utilization of Public Facility by Adolescents in case of Large Scale Children's Center and Ordinary ones	97
15. K. Hirata : A Device for Promoting Consciousness of Ecological Issues Among Young People	105
16. M. Yamasaki and H. Gotoh : A Study of the Appearance of Zoushigaya 2 — The influence of the rise and fall of the Kishimojin Temple upon the appearance —	113
17. D. Shimazu, K. Izumikawa, S. Yamamoto, M. Akashi, M. Sakai, T. Tahara and S. Harada : A Study of Line-up Analysis in International Women's Volleyball 2000 Olympic Final Qualification Matches — Rank-stability, Rank-change and Rank-agreement : Rates as well as Rank Correlation of Line-ups —	119
18. Y. Taya and A. Fujimura : Characteristic of Thermal Sensation of Hands during Wearing Gloves	129
19. K. Matsunashi and K. Shimazaki : Measurement of Dynamic Thread Tension during Blind Stitch Machine Sewing and Its Sewing Thread Consumption	135
20. T. Sakata : Some Analysis of Home Education So-called "Free School" — An Aspect of Truancy/School-Phobia —	141
21. H. Horoiwa : Theoretical Background of Psychoeducational Intervention to Adolescent Crime and Child Abuse — Relation to the Pasonality Style —	147
22. H. Horoiwa and R. Imamura : Identification and Personalization in Adolescence — A case-study analysis —	155
<hr/>	
Title of Bachelor's Theses Presented to the Faculty of Home Economics, 2001	161

JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

2002

日本女子大学の卒業生実態調査

— 第2報 通信教育課程卒業生の場合 —

The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates

— Part 2. Case of the Correspondence Course Graduate —

教育学科	真橋美智子	住居学科	沖田富美子
Dept. of Education	Michiko Mabashi	Dept. of Housing and Architecture	Fumiko Okita
被服学科	佐々井 啓	食学科	塚原 典子
Dept. of Clothing	Kei Sasai	Dept. of Food and Nutrition	Noriko Tukahara

抄 録 本稿では「日本女子大学家政学部通信教育課程卒業生の実態調査」を通して、通信教育課程（以下「通信」）がどのような卒業生を送り出してきたかを探ることが目的である。「通信」の教育、卒業後の生活、「通信」の評価等の各面から検討し、以下のような結果が得られた。

1. 「通信」の利点である職業や家庭との両立を目指して、「通信」を選択する者が多いが、一方で生涯学習として学ぶ者が増加傾向にある。
2. 「通信」の教育ではスクーリングが学生にとって重要な体験で、学習上の支えになっているが、同時に参加自体が学習継続の障害になるという両面がみられる。
3. 全体として、卒業生は「通信」の教育が卒業後の日常生活や職業に生かされていると評価している。

キーワード：通信教育課程卒業生、スクーリング、学習形態、生涯学習

Abstract The purpose of this paper is to explore what kind of graduates are produced by the Correspondence Course, based on "The Japan Women's University Home Economics Department Correspondence Course Graduates Survey."

Education acquired through the Correspondence Course, life after graduation, and evaluation of the Correspondence Course were investigated. The following results were obtained:

1. There are many who choose the Correspondence Course because it is an unusual means of study. On the other hand, those who take the Course as a lifelong learning course are increasing in number.
2. Schooling is a very important experience and becomes a support to learning for a student in the Correspondence Course. However, it is also true that participation in schooling itself can become an obstacle to continuing learning.
3. On the whole, graduates consider the education obtained through the Correspondence Course to be useful in their daily lives and occupations after graduation.

Keywords : graduates of a correspondence course, schooling, learning form, lifelong learning

1. はじめに

本稿では、前掲の第1報に引き続き「日本女子大学家政学部通信教育課程卒業生の実態調査」結果について報告する。調査結果の分析を通して、通信教育課程卒業生の全体的な傾向と特質を明らかにし、通信教育

課程（以下「通信」）がどのような卒業生を送り出してきたか探ることが本報の目的である。

日本女子大学通信教育の起源は、創立者成瀬仁蔵の「大学拡張」の教育理念に基づき、1908（明治41）年に発足した「女子大学通信教育会」による『女子大学講義』の発刊にさかのぼる。そのねらいは第一に、

卒業生が卒業後も生涯進歩発展していくための指導・参考となるように、第二に高等教育を希望する者への予備的教育、あるいは希望しつつそれが無理な者への学習機会の提供にあった。

第二次世界大戦後、日本女子大学が新制大学として発足した翌年の1949年1月、家政学部通信教育部として再出発し、今日に至っている。わが国初の四年制大学家政学部通信教育で、児童学科、食物学科、生活芸術学科から構成される。

本学「通信」卒業生に対する調査研究として、すでに本学女子教育研究所『日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査』（1991年）がある。対象は1回生から36回生までで、在学中の学習（満足度、学習上の問題点・改善点など）、卒業後の生活、生涯学習の一環としての通信教育などについて報告している。しかし同調査は家政学部としての「通信」に焦点を当てたものではない。ただし基本的な項目や卒業後の生活など共通する部分もあり、調査票作成にあたり参考としている。

2. 調査および調査対象者の概要

2-1 調査の概要

(1) 調査の目的

本学「通信」卒業生に、「通信」の教育、卒業後の生活や再教育などについてたずね、「通信」における教育の卒業後の生活および全人的発達などへの影響を探る。

(2) 調査対象者および調査方法

調査は、1953年3月から1992年3月までの「通信」卒業生（1回生～40回生）の中から4分の1の抽出による1,271名を調査対象者として、2000年5月20日から同年6月末日までに郵送法にて実施した。

有効回答数は537票（児童199票、食物225票、生活芸術113票）、回収率は42%である。

2-2 調査対象者の概要

(1) 出身校

入学前の出身校は「短期大学」（37.1%）が最も多く、次いで「全日制高校」（32.4%）で、両者で約70%を占める。以下、「旧制女学校」、「旧制女子専門学校」、「大学」、「師範学校」の順である。学科別にみると児童学科では「全日制高校」、「大学」が3学科中最も多く、食物学科および生活芸術学科では「短期大学」が多い。（図1）また旧い回生で「旧制女学校」、「旧制女子専門学校」、「師範学校」といった旧制度の学校出身者が多くみられる。

ちなみに1999年度入学者の学歴構成は「高校卒」

（37.6%）、「短大卒」（32.9%）、「大学卒」（24.2%）の順で、「大学卒」が4分の1を占めている。

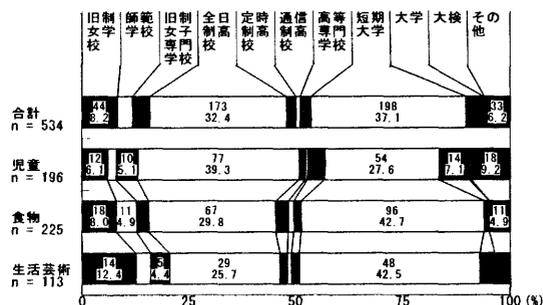


図1 入学前の最終学歴

(2) 入学時の年齢

入学時の年齢は「19歳以下」から「50歳以上」まで幅広いが、「20から24歳」（40.2%）の年齢層が最も多く、24歳以下で全体の50%を占めるが、その一方で30歳以上が全体の4分の1を占めている。（図2）近年は24歳以下の減少、30歳以上の増加傾向がみられる。

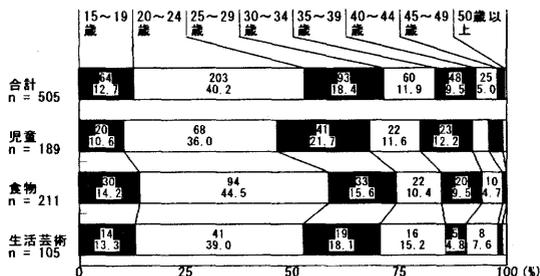


図2 入学時年齢

(3) 入学形態

出身校とも関連するが、入学形態では「1年次入学」（53%）が最も多く、次いで「編入学」（40%）、「学士入学」（3.4%）の順であるが、近年（40回生を除く）は「1年次入学」の減少傾向がみられる。学科別にみると児童学科で「1年次入学」、「学士入学」が3学科中最も多く、食物学科と生活芸術学科では「1年次入学」と「編入学」が同程度に多くなっている。（図3）

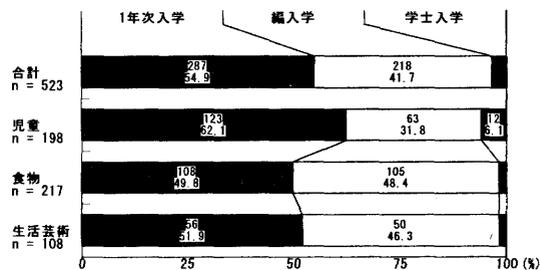


図3 入学形態

(4) 在学期間・在学形態

「通信」の場合、もともと出身校や取得単位数により修業年限は2年から4年と幅がある。実際の在学期間では最も多いのが「4年から5年」(41.9%)、次いで「6年から7年」(23.1%)であるが、卒業までに10年以上かかった者も10%以上を占め、各学生の事情により在学期間の差は大きい。

さらに、回答者の約80%が卒業まで「ずっと継続」して在学していることから、職業や家庭と勉学を両立させることの困難さが推察される。

(5) 入学時の職業

入学時に職業を持つ者は全体の約80%であるが、学科別では食物学科の有職率が最も高く、児童学科が最も低い。(図4) なお有職率は徐々に減少傾向にあり、近年は職業を持たない入学者が増加している。

有職者の業種は「教育」(62.1%)が最も多く、以下「公務」(15.2%)、「医療・福祉」(7.5%)の順である。学科別では生活芸術学科に「教育」(74.4%)が多く、児童学科に「医療・福祉」(13.1%)がやや多くみられる。

職種では「教員」(58.6%)が最も多く、次いで「事務・秘書」(16.5%)、「栄養士」(4.8%)の順であるが、「教員」は減少傾向にある。学科別では生活芸術学科に「教員」(75.9%)が最も多く、児童学科では「事務・秘書」が、食物学科では「栄養士」が3学科中最も多い。(図5) ちなみに1999年度の入学者の職業別構成は「会社員等」(30.2%)、「無職・主婦」(29.1%)、「無職・その他」(15.3%)、「教員」(13.5%)の順で、「教員」の比率は低く、前述した無職の入学者の増加が目立つ。

勤務形態は「フルタイム」が85%以上を占め、その他に「非常勤・臨時」、「パートタイム」、「アルバイト」がみられる。

(6) 在学中の職業

入学時の職業を在学中も「継続」した者が80%以上を占めるが、その一方で「転職」した者が10.6%、「退職」した者も8.4%である。転職後の在学中の職種は「教員」が最も多く、「事務・秘書」、「栄養士」が次いでいる。勤務形態は「フルタイム」が多く、次いで「非常勤・臨時」である。

(7) 現在の生活

回答者の現在の生活についてみると、「既婚」者が80%以上を占め、「未婚」者は20%に満たない。学科別にみると未婚率が食物学科で若干高く、生活芸術学科で最も低い。子どもは「2人」が最も多く、以下

「3人」「1人」「0人」の順である。

また自分を含む家族の人数は「2人」(34%)が最も多く、次いで「4人」、以下「3人」、「1人」、「5人」の順である。

3. 通信教育課程の教育

(1) 通信教育課程選択理由

特に「通信」を選択した理由は、「職業と両立できる」(44.9%)が最も多く、以下「家庭の事情に応じて学べる」、「仕事の事情に応じて学べる」、「生涯学習として学べる」が続き、通信教育の利点とされてきた職業や家庭との両立が最も重視されているが、同時に生涯学習社会の中で生涯学習のために入学する者が増加傾向にある。

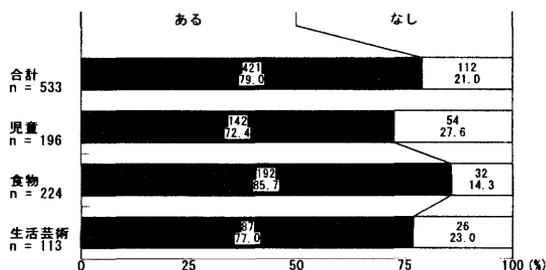


図4 入学時の職業の有無

入学時に職がある人

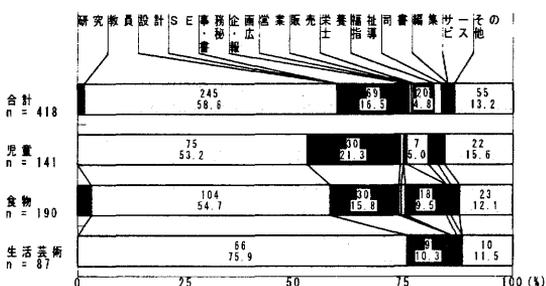


図5 入学時の職種

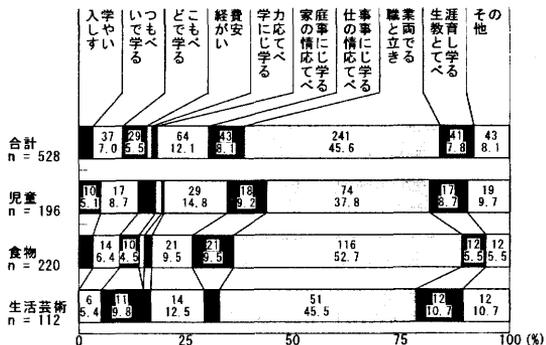


図6 通信を選んだ理由

学科別にみると「職業と両立できる」は入学時の有職率が高い食物学科に最も多く、「仕事の事情に応じて学べる」を合わせると60%を上回る。また「家庭の事情に応じて学べる」が児童学科に、「生涯学習として学べる」は生活芸術学科に若干多くなっている。(図6)

(2) 学科選択の動機

学科を選択した動機(複数選択)では、「専門の勉強がしたかった」(57.2%)が最も多く、次いで「資格、免許を取りたいと思って」(51.8%)が続き、専門や資格といった職業に関連した動機をあげる者が共に半数を超えている。これは有職者の入学が多いこととも関連すると思われる。以下「その学科が自分の適性に合っていると思ったので」、「社会的視野を広げるため」、「将来社会の役に立ちたいと思って」、「女性としての将来に役立ちそうだから」などの動機があげられている。

学科別にみると、児童学科は全体の傾向とあまり変わらないが、「将来社会の役に立ちたい」は3学科中最も多く、食物学科では「専門の勉強」が3学科中最も多い。入学時の職種で「教員」が最も多い生活芸術学科では、「資格・免許」が最も多く、次いで「専門の勉強」、「自分の適性」で、他学科とは異なる傾向がみられる。(図7)

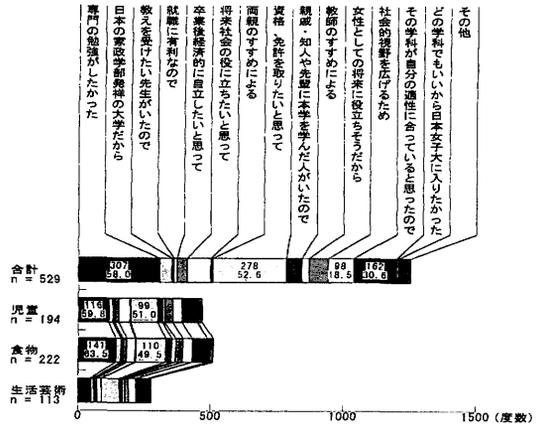


図7 学科選択の動機

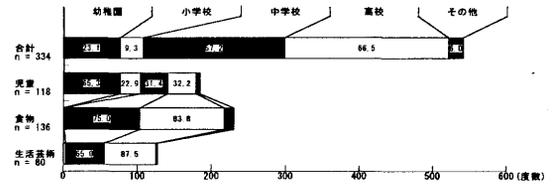


図8 取得した資格

表1 共通専門科目

		N=327	
		実数	%
教養が身についた、視野が広がった		94	28.7
学んでよかった		64	19.6
当然だと思って履修		35	10.7
家政学の基礎、全体を学んだ		33	10.1
自分の専門以外の学習		25	7.6
生活、子育てに役立った		19	5.8
職業、資格に生かされた		16	4.9
他学科の学生との交流		9	2.8

(4) 通信教育課程の教育

では卒業生たちは「通信」の教育をどのように受けとめているのであろうか。「共通専門科目の履修」および「学んでよかった点」「問題点」の自由記述から探してみる。

まず「共通専門科目の履修」では、回答者の90%までが肯定的に評価している。評価の具体的内容をまとめると、表1の通りであるが、「教養が身についた、視野が広がった」(28.7%)が最も多く、次いで「学んでよかった」(19.6%)、以下「当然だと思って履修した」、「家政学の基礎、全体を学んだ」、「自分の専門以外の学習ができた」の順である。多くが家政学を広く学び、教養が身についたと評価している。

次に「通信」で「学んでよかった点」は表2の通りで、「スクーリング」に関するものが最も多く、次いで「教育」に関するもの、通信独自の「学習形態」に

(3) 在学中に取得した資格・免許

前述したように学科選択の動機で半数以上の者が「資格、免許」の取得をあげていたが、実際の資格・免許取得者は全体の約62%で、学科別では学科選択理由で「資格、免許」取得が最も多い生活芸術学科で70%と最も多い。その種類は教員免許がほとんどである。そこで教員免許について以下に詳しくみていくことにする。

本調査対象者在学中の本学「通信」では、次のような教員免許が取得できた。児童学科では1977年度以前には幼稚園教諭一級普通免許状、中学校教諭一級普通免許状(家庭・保健)、高等学校教諭二級普通免許状(家庭・保健)が取得できたが、78年度以後は幼稚園教諭一級普通免許状、小学校教諭一級普通免許状の2種類のみが取得できるように変更になった。食物学科および生活芸術学科では中学校教諭一級普通免許状(家庭・保健)、高等学校教諭二級普通免許状(家庭・保健)、幼稚園教諭二級普通免許状が取得できた。

なお取得された教員免許では「高等学校」免許が最も多く、次いで「中学校」免許、以下「幼稚園」免許、「小学校」免許の順であるが(図8)、教員採用の厳しさを反映してか教員免許取得者は新しい回生で減少傾向にある。

関するものが続き、以下「職業、資格取得」、「卒業できたこと、その自信」の順である。特に「スクーリング」における「友人・仲間」との交流や「教員」との出会いをあげる者が多い。職業や家庭と両立しながら学ぶ学生たちにとって、多くの仲間と出会い、直接教員の講義が受講でき、実験や実習を体験できる夏期スクーリングが大学生活に刺激を与え、学習継続の大きな支えとなっている。

表2 学んでよかった点

N=484		
	実数	%
通信の学習形態		
・職業との両立	37	7.6
・家庭・子育てとの両立	21	4.3
・自分のペースで学べる	66	13.6
・地方でも学べる	8	1.7
・入学しやすい	7	1.4
スクーリング		
・講義、実験・実習	22	4.5
・教員	71	14.7
・友人・仲間	127	26.2
・寮生活	26	5.4
・その他	30	6.2
教育		
・教養・広い視野	42	8.7
・専門教育	59	12.2
・学習態度が身についた	28	5.8
・レポート・試験	32	6.6
・軽井沢の卒業面接	14	2.9
・施設・設備	9	1.9
職業、資格取得	58	12.0
卒業できたこと、その自信	49	10.1
校風、教育理念	20	4.1
人間形成、価値観	23	4.8
家庭、子育てに役立つ	9	1.9
学ぶ喜び、生涯学習	22	4.5
その他	10	2.1

表3 問題点

N=333		
	実数	%
学習継続		
・職業との両立の困難、退職・転職	22	6.6
・家庭との両立の困難	12	3.6
・独学の困難	34	10.2
・地方での学習上の問題	16	4.8
・卒業までの年数	12	3.6
スクーリング		
・参加が困難	27	8.1
・時期、期間、設備	22	6.6
・時間割、科目数、単位	10	3.0
・講義、予習・復習、話し合い	11	3.3
・実験、実習	20	6.0
・寮、宿泊	7	2.1
・経済的負担	5	1.5
教育		
・テキストのみの学習・テキストの理解	11	3.3
・試験、レポート	27	8.1
・質問、指導	20	6.0
・学力不足、学習が深まらない	21	6.3
・より専門的内容に	6	1.8
・特定の科目が難しい	11	3.3
・ゼミ、卒論がない	5	1.5
職業、資格取得		
・教員免許、教育実習	21	6.3
・その他の資格	9	2.7
・卒業しても職業に生かされない	7	2.1
友人との交流	25	7.5
教員とのふれあい	17	5.1
通信に対する偏見	28	8.4
編入生の単位認定	8	2.4
事務局の対応	5	1.5
その他	24	7.2

一方、「問題点」は表3の通りで、よかった点同様「スクーリング」、「教育」、そして「学習継続」に関するものが多くあげられている。つまり通信の利点は、同時に問題点にもなっている。例えば「自分のペースで学べるが、意思を強く持たないと誰も促してくれないので挫折しやすい」という側面もある。「スクーリングにどうしても出席できず在学期間が予想以上に延びてしまった」のように「スクーリング」への「参加が困難」、「テキストのみの学習」や「職業、資格取得」をめぐる不満や問題点、さらに「通信に対する偏見」などが指摘されている。

これらの点をふまえて、「通信」での学習が卒業後の生活に生かされているか、「日常生活」「職業」「社会的な活動」の各面からたずねた。まず「日常生活」へは「生かされている」者が約90%と圧倒的多数を占める。(図9) その理由では「広い視野で考えることができる」、「生きていく上で精神的な支えを得た」が共に多く、以下「よい友人を得ることができた」「専門的知識や技能が身についた」「自分の価値観を形成できた」の順である。(図10)

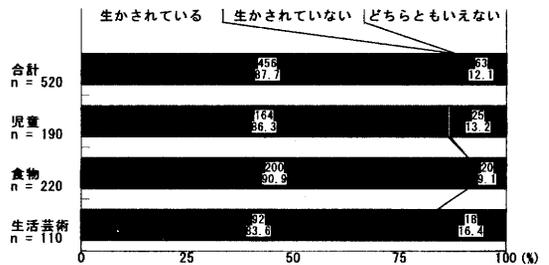


図9 日常生活への影響

日常生活に生かされている人

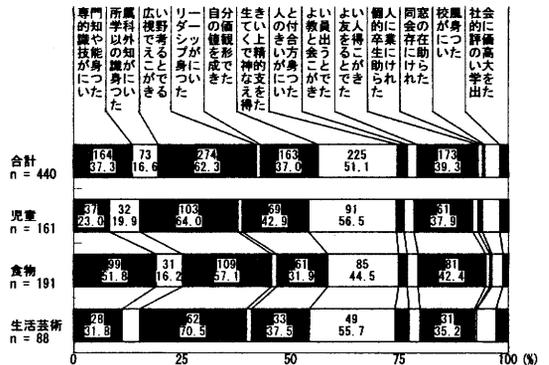


図10 日常生活に生かされている理由

また「職業」の面でも「生かされている」者が82.5%と多数を占め、学科別では食物学科に最も多い。

(図11) 理由として「専門的知識や技能が身についた」(78.1%)がずば抜けて多く、次いで「広い視野で考えることができる」で、以下「所属学科以外の知識が身についた」「よい教員と出会うことができた」の順である。(図12) 本調査では卒業直後を除く現在までの職業についてたずねていないため、職種との関連は明らかではないが、後述するように在学中および卒業直後の職種では「教員」が圧倒的に多い回答者において、職業に生かされていると評価する者が多いということである。

なお前述した「学科選択の動機」と「職業への影響」の関連をみると、「専門的勉強がしたかった」「経済的に自立したい」「資格、免許を取りたい」から学科を選択した者に、職業に「生かされている」と回答する者が若干多い。(図13)

最後に「社会的な活動」では「生かされている」者は64.9%にとどまり、日常生活および職業の場合に比べるとかなり低くなっている。(図14) 生かされている理由としては「広い視野で考えることができる」が最も多く、以下「自分の価値観を形成できた」「リーダーシップが身についた」「生きていく上で精神的な

支えを得た」「専門的な知識や技能が身についた」の順である。(図15)

4. 卒業後の生活

(1) 卒業直後の進路

卒業直後の進路では、「それまでの職業を継続した」(54.2%)が最も多く、次いで「新たに職業に就いた」(17.7%)で、職業生活を選択した者が70%以上を占める。しかし入学時の有職率(79.0%)よりは減少している。以下、「さらに勉学を続けた」(9.4%)、「結婚した」(6.1%)の順である。学科別では食物学科に職業生活を選択した者がやや多くみられる。(図16) なお「それまでの職業を継続」する者は徐々に減少傾向にあるが、その一方で「勉学を続ける」者は増加傾向にある。

「学科選択の動機」と「卒業直後の進路」との関連をみると、「専門的勉強がしたかった」や「資格、免許を取りたい」、さらに「家政学部発祥の大学だから」という理由で学科選択をした者に「それまでの職業を継続した」者がやや多い。また「社会の役に立ちたい」「経済的に自立したい」ので学科を選択した者に「新たに職業に就いた」者が多くみられる。(図17)

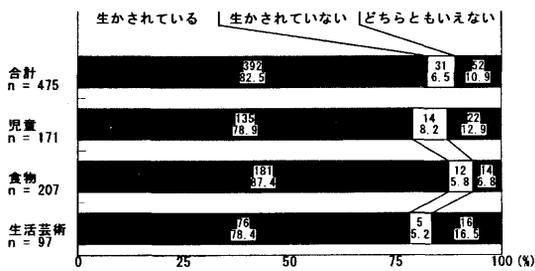


図11 職業への影響

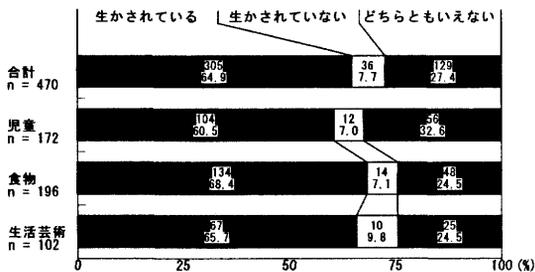


図14 社会的な活動への影響

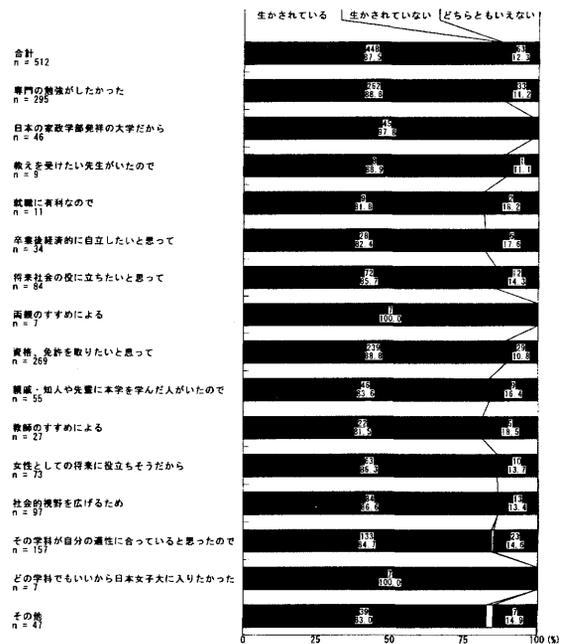


図13 学科選択の動機/職業への影響

職業に生かされている人

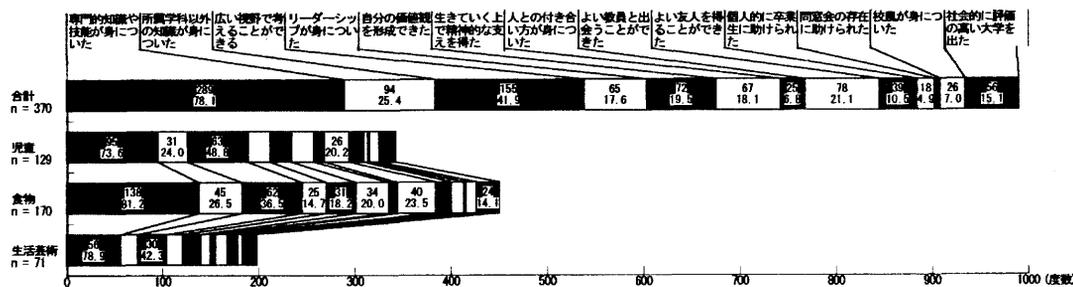


図12 職業に生かされている理由

社会的な活動に生かされている人

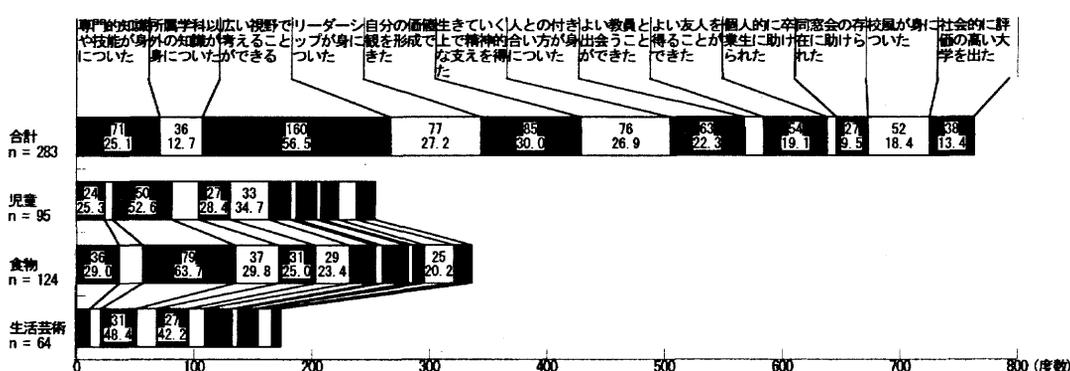


図15 社会的な活動に生かされている理由

図16 卒業直後の進路

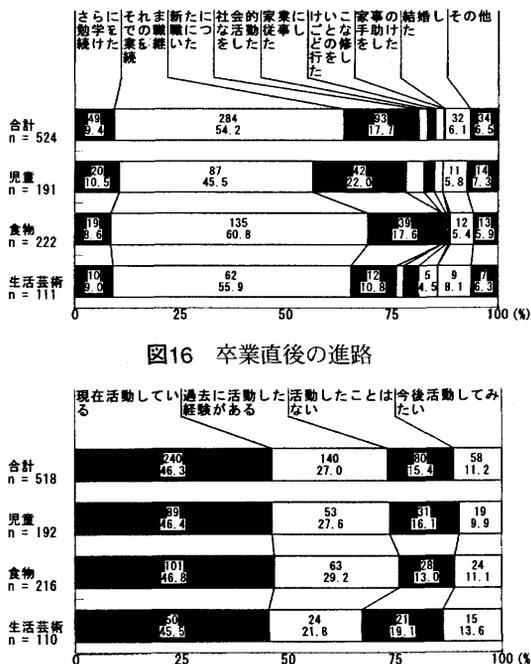


図18 社会的な活動経験の有無

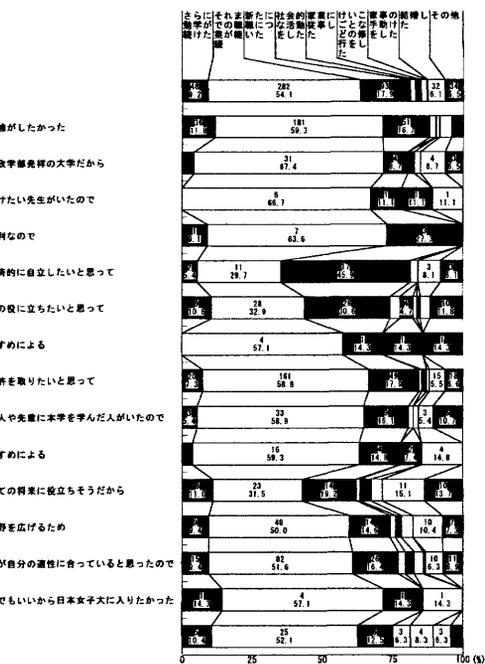


図17 学科選択の動機/卒業直後の進路

次に、新たに就いた「業種」は、「教育」(62.0%)が最も多く、「医療・福祉」(15.5%)がそれに次いでいる。また「職種」では「教員」(60.3%)がずば抜けて多く、以下「事務・秘書」(12.7%)、「栄養士」(9.5%)、「福祉指導」(6.3%)の順である。勤務形態は「フルタイム」(60.3%)が最も多く、次いで「非常勤・臨時」(22.4%)である。

以上のように、卒業直後には職業生活を選択する者が多いが、在学中の職業を継続する者は減少傾向にある。また、減少傾向がみられるものの「継続した」および「新たに就いた」職業共に圧倒的に教員が多い。一方、「生涯学習として学べる」から通信教育課程を選択する者が増加傾向にあるが、卒業後も「勉学を続ける」者も増加傾向にある。全体として卒業直後の進路は多様化しているといえよう。

(2) 社会的な活動

入学時にすでに職業や家庭を持つ者が多い「通信」の卒業生では、卒業後どのような「社会的な活動」を経験しているのだろうか。

社会的な活動では、「現在活動している」(46.3%)、「過去に活動した経験がある」(27.0%)を合わせると70%以上が活動経験者である。(図18)

活動の種類は「地域団体」(54.4%)が最も多く、次いで「趣味サークル」(33.2%)、「社会福祉団体」(23.6%)が多く、以下「職域団体」、「研究団体」、「学習サークル」、「同窓会」、「有志団体」、「宗教団体」の順である。学科別にみると児童学科で「地域団体」、「有志団体」が他学科に比べて若干多く、卒業直後に職業生活を選択した者が多くみられた食物学科で「職域団体」、「研究団体」がやや多く、生活芸術学科では「社会福祉団体」が多くなっている。(図19)

なお、上記の活動以外に公職の経験をたずねているが、公職に「現在についている」、「過去についていたことがある」者はそれぞれ約10%であるが、公職経験者は近年減少傾向にある。学科別では児童学科と生活芸術学科に若干経験者が多い。

(3) 再教育

前述したように生涯学習のための入学者が増加傾向にあり、卒業直後にさらに勉学を続けた者も10%近くみられた。そこで現在の再教育(キャリアアップや再就職、社会活動のために役立つ教育)に対する希望をたずねた。結果は「すでに受けている」者も20%程度いるが、「受けたいと切望している」(15.5%)、「受けてもよいと思っている」(33.3%)と切実度の

違いはあるが、約半数が再教育を希望している。(図20)特に新しい回生に希望者が多くみられる。

希望する再教育の種類では、「講座」(47.4%)が最も多く、次いで「大学または大学院に聴講」(30.3%)で、以下「大学または大学院に入学」および「各種学校・専門学校」、「留学または研修」、「通信教育」の順である。「講座」や「聴講」といった比較的容易に受講可能な形態を希望する者が多いが、その一方で「大学や大学院」、「専門学校」などに入学して、あるいは「留学」をして本格的な教育を受けたいと希望する者もそれぞれ10%程度みられる。学科別では児童学科で「大学または大学院に入学」が、生活芸術学科に「留学または研修」、「各種学校・専修学校」が若干多くなっている。(図21)

また本学の家政学部卒業生のための再教育制度が発足したら希望するかどうかについては、希望する者が42.5%、希望しない者が57.5%と後者が上回るが、これは後述するように年齢との関連が大きい。学科別では児童学科で希望者が50.3%と最も多い。(図22)

希望理由を自由記述からまとめると表4の通りで、「新しい知識を学びたい・知識を深めたい」(26.1%)が最も多く、次いで「専門的に学びたい」(20.7%)、「生涯学習として学び続けたい」(11.7%)が多く、以下「日本女子大学の制度だから」「時間に余裕ができた」「キャリアアップ、職業に役立つ学習」の順である。つまり新しい知識や専門的知識の修得およびキャリアアップに役立つ学習と生涯学習という2タイプの希望理由がみられる。

一方希望しない理由では「高齢のため」が最も多く、以下「地理的に遠方」「異なる分野の学習に関心」「多忙である、時間がない」が続いている。(表5)

5. 家政学部通信教育課程の評価と展望

最後に本学「通信」の教育が、全人的な発達に影響しているかどうかをたずねた。「影響している」と回答した者が84.4%を占め、「どちらともいえない」が14.4%で、「影響していない」は1.2%にすぎない。影響があったと受けとめている主な理由を自由記述からまとめると、結果は表6の通りである。「卒業したことが自信、誇り」が最も多く、次いで「人間形成、生き方」「学習意欲、習慣、生涯学習」「最後までやり遂げる意志、努力」が多く、以下「広い視野、価値観、ものの見方」「創立者の教育理念、三大綱領」「友人、先輩との交流」「教員、女性教員の影響」の順である。

社会的な活動経験のある人

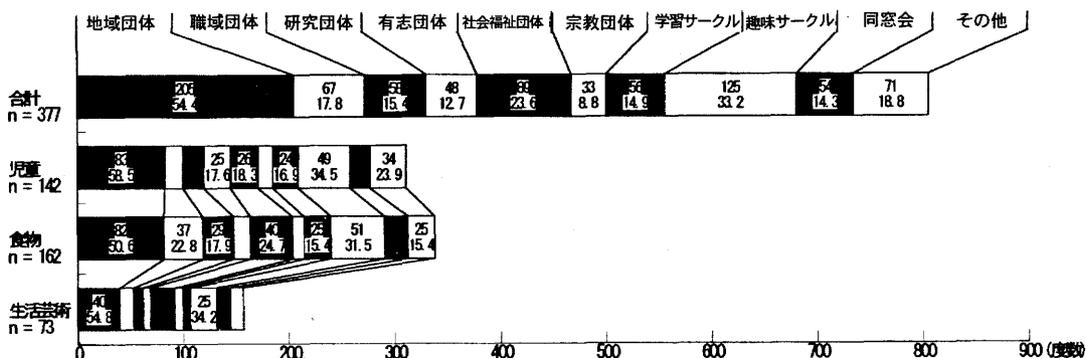


図19 社会的な活動の種類

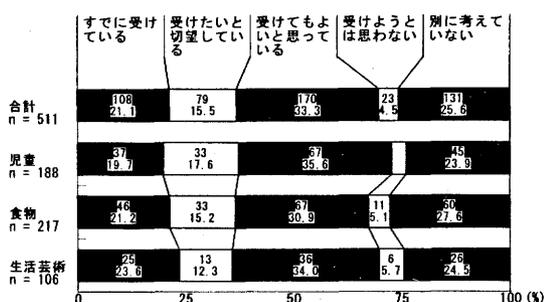


図20 再教育の希望

表4 再教育希望理由

	N=188	
	実数	%
専門的に学びたい	39	20.7
新しい知識を学びたい、知識を深めたい	49	26.1
生涯学習として学び続けたい	22	11.7
日本女子大学の制度だから	15	8.0
時間に余裕ができた	13	6.9
キャリアアップ、職業に役立つ学習	11	5.9
自己の向上	7	3.7
社会的貢献	6	3.2
勉強が好き	3	1.6

再教育を受けたいと思っている人

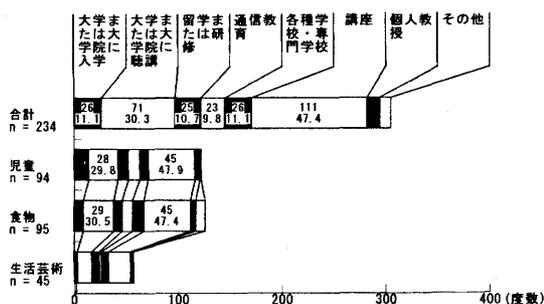


図21 希望する再教育の種類

表5 再教育を希望しない理由

	N=217	
	実数	%
高齢のため	83	38.2
地理的に遠方だから	36	16.6
異なる分野の学習に関心	30	13.8
多忙である、時間がない	27	12.4
体力的に無理	21	9.7
親の介護、家庭の事情	15	6.9
健康上、病弱	13	6.0
経済的理由	7	3.2

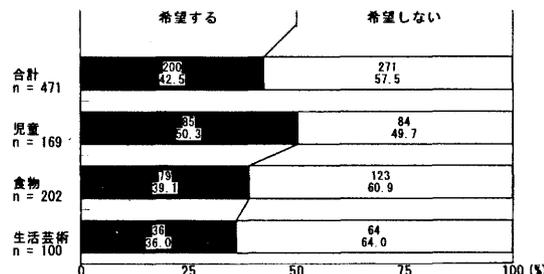


図22 家政学部の再教育制度

表6 全人的発達への影響

	N=364	
	実数	%
卒業したことが自信、誇り	79	21.7
人間形成、生き方	56	15.4
学習意欲、習慣、生涯学習	55	15.1
最後までやり遂げる意志、努力	51	14.0
広い視野、価値観、ものの見方	42	11.5
創立者の教育理念、三大綱領	39	10.7
友人、先輩との交流	38	10.4
教員、女性教員の影響	29	8.0
寮生活	11	3.0

上位の理由は通信教育課程という独特の学習形態と深く関わっているものと思われる。つまり職業や家庭と両立させながら、孤独な学習やスクーリングの困難を乗り越え、卒業に至る過程、そして卒業達成のなかで獲得されたものが全人的な発達に影響したものと推察される。その一方で、創立者の教育理念などの日本女子大学教育の特質も影響したと受けとめられている。

なお、今後の「通信」の方向・あり方に関する自由記述部分については本稿では取り上げていないが、前述した「学んでよかった点」および「問題点」とも重なる。通信教育の「誰でも、いつでも、どこでも」学べるという利点は、確かに職業や家庭と大学教育の両立を可能にしてきた。「学んでよかった点」で卒業生の多くがそのことを指摘している。しかしその一方で、両立には職業生活等の傍ら孤独な学習を継続する強い意思と努力が求められる。学習方法がわからない、指導を受けられないという悩みも「問題点」に多くみられる。学習機会が多様化し、「通信」への期待も変化する中で、卒業生の声に耳を傾け、伝統ある日本女子大学「通信」の今後のあり方を検討していくことが必要と考える。

6. おわりに

本調査結果から得られた「通信」卒業生の全体的な傾向と特質を以下に述べる。

1. 「通信」の利点である職業や家庭との両立から入学する者が多いが、一方で生涯学習として学ぶ者が増加傾向にある。本調査では少数であったが、近年学士入学者が増加しており、学生のニーズの多様化がより進むものと思われる。
2. 学科選択では専門や資格を重視する者が多く、実際に全体の6割が教員免許を取得している。それとともに教員免許以外の資格取得を望む声も聞かれた。
3. 家政学部としての共通専門科目履修については、大多数の卒業生が家政学の基礎として、教養としての意義を評価している。

4. 「通信」の教育では「スクーリング」が学生にとって最も重要な意味を持ち、学習継続の刺激や支えにもなるが、職業や家庭と両立させる上では参加自体が障害となるという両面がみられる。中にはスクーリングのたびに転職した者もいる。

5. 「通信」の教育は全体として卒業後の日常生活や職業に生かされていると評価する者が多い。

6. 卒業直後の進路では職業を選択する者が多数を占めるが、勉学を続ける者も増加傾向にあり、進路の多様化傾向がみられる。

7. 再教育については、すでに受けている者以外に、約半数が希望しており、関心は高いといえる。希望する種類・形態は比較的容易に受けられるものが多いが、一部には本格的な再教育を希望する者もみられる。また本学家政学部の再教育制度の希望者は高齢などを理由に半数には満たないが、専門的に学びキャリアアップを目指す者と、生涯学習として学び続けたいと考える者との2タイプがある。

8. 「通信」独自の学習形態がもたらした教育の成果が全人的発達に影響していると評価する者が多い。

以上のように本調査からは「通信」卒業生には、家政学部という意識よりもあくまでも「通信」で学び卒業したことの方が強く意識されている。そのため、前述したような「通信」卒業生の全体的な傾向は浮き彫りになるが、学科別の特徴はそれほど明確ではない。ただし食物学科の卒業生は若干職業志向が強いように思われる。さらに家政学部「通信」卒業生としての特質を明確にするためには、第1報で報告している家政学部卒業生との比較検討が必要であると思われる。

参考文献

- 1) 日本女子大学女子教育研究所『日本女子大学通信教育課程卒業生に関する調査』1991年
- 2) 通信教育創設50周年記念事業委員会『日本女子大学通信教育の50年』日本女子大学通信教育課程1999年

本号掲載論文受理日 2001年9月28日
(紀要委員 平田京子・馬岡清人)

日本女子大学紀要 第49号

2002年3月5日印刷

2002年3月10日発行

編集兼
発行者

日本女子大学家政学部

発行者

東大教材出版

東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-3813-7389

FAX 03-3814-7989

発行者

日本女子大学

東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03-3943-3131

ISSN 0288-304X